

第8講 哲学

読解演習

解答

問一 哲学

問二 見渡す・特別な位置

問三 存在するものの全体がなんであるかという問い

問四 イ

問五 ウ

問六 例 古代ギリシアの早い時期の思想家たちは、自然がすべてだと考え、万物は自然だと見ていたから。(四十四字)

問七 ソクラテスやプラトンの時代

問八 エ

解説

問一 直接には「西洋以外の他の文化圏には生まれ」なかった考え方を指す。前の段落では「特定の考え方」で終わる部分が三つあり、それらはいずれも「哲学」の定義。従って、一語で表すなら「そんな考え方」＝「哲学」、となる。

問二 哲学をするためには「自分たちが存在するものの全体のうちにいながら、その全体を見渡すことのできる特別な位置に立つことができると思わなければならない」とある。この「存在するものの全体」は第三段落で「自然」に置き換えられている。よって第二段落の表現は「自分たちが自然のうちにいながら、自然全体を見渡すことのできる特別な位置に立つことができると思わなければならない」と言い換えられる。したがって「超自然的存在」は「自然全体を見渡すことのできる特別な位置に立つ」存在である、ということが出来る。

問三 直前の文中に示された「問い」を押さえる。「存在するものの全体がなんであるか」という問いは二十三字で、条件に合う。

問四 線④の「特殊な見方、考え方」をするのは「哲学」。哲学が自然をどう

見るかは、次の段落に説明されており、「そうした哲学の見方からすると、自然は超自然的原理……によって形を与えられ制作される単なる材料」になり、「自然は生きたものではなく、制作のための無機的な材料・質料にすぎない物、つまり物質」になるとある。これに合うのはイ。他の選択肢は、どれも自然を生きたものとする考え方。「自然とは、もともとは文字どおりおのずから生成していくもの、生きて生成していくもの」とする自然観に合う。

問五 「日本人のものの考え方の方がずっと自然だった」から、と直後にある。「自分が自然のなかにすっぽり包まれて生きていると信じ切っていた」というような日本人の考え方の方がむしろ自然な考え方であり、西洋のような哲学がなかったからといって恥じる必要はないのである。

問六 線⑥は第七段落の冒頭の文であり、その理由は直後に説明されている。「古代ギリシアの早い時期、通常『ソクラテス以前の思想家たち』(前六―前五世紀)」と呼ばれているアナクシマンドロスやヘラクレイトスらの活躍した時代のギリシア人は、そんな反自然的な考え方はしていなかったようです。自然がすべてだと考え、万物は自然だと見ていました。」という二文からまとめる。短くまとめるには主語を「古代ギリシアの早い時期の思想家たち」などとし、彼らが「自然がすべてだと考え、万物は自然だと見てい」たから、などとするよよい。

問七 「イデア」のような発想法は反自然的な「哲学」に結びつく。これが持ちこまれた「とき」を表す言葉として「ソクラテスやプラトンの時代」をつかむ。

問八 「哲学」という話題についてそれが何であるかを明確にしているものを選ぶ。

重要語句

①肯う……肯定する。道理にかなっていると思つて承諾する。

例文↓彼女の利他的な行いが専かったことは、私も肯うことができる。

②修羅場……激しい戦闘が行われる場面。相手を倒して優位に立つと闘う場面。

例文↓感情の行き違いで、討論会場はいつとき修羅場と化した。

③無機的……生命を持たない物である様子。対義語は「有機的」。

例文↓コンクリートだらけの風景は無機的な印象を与える。

④連綿……長々と引き続いていて途切れない様子。

例文↓この地域には数百年前から連綿と受け継がれてきた行事がある。